（別紙６－２）

# 学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：保健学研究科１年

氏 名：久保田杏梨

| 授業科目名 | 実践助産学Ⅰ |
|---|---|

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

今回のイギリス研修では、Queen Charlotte's and Cheisea Hospitalでの産科病棟の見学とWest London Universityの助産学生との交流、Family Hubの見学と関連する職種の方々との交流、ジョン・スノウやフローレンス・ナイチンゲールといった医療の発展に関係する人物の史跡を訪れた。これらを通して、日本とイギリスの周産期医療や助産学教育の共通点や相違点を理解することができ、またイギリスの各地域の特徴や文化的背景、それによる周産期の課題やそれに対する取り組み・支援について学ぶことができた。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

イギリスでの生活を通して、文化や歴史的背景はもちろんのこと、宗教、価値観に直接ふれることができた。そこから日本の文化や価値観と比較し、互いのメリット・デメリットについて話し合い、理解、尊重することができた。また、アジア人への差別を目の当たりにしたことや自分自身も差別を受けたことから、人種差別が今でも根強くあることを体感した。滞在時にanti racism demoが各地域で行われており、一人一人の人種差別への意識付けが必要であると考えた。更に、イギリスは他国からの移住者の割合が多く、地域ごとに文化や宗教等の特徴があり、それによる様々な課題に対しての取り組みについても学ぶことができた。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

イギリス在住の日本人助産師と助産学生と交流を行った際に、「積極的な意見」「対等な立場」が重要視されていた。日本人の特徴として空気を読んで意見を言わないことや謙る姿勢があげられ、イギリスではその様な姿勢は何も考えていない、何もできない人に捉えられるという。実際、イギリスの助産学生は指導者に対して、疑問点や自分の考えとの相違点を伝えており、しっかりと互いの意見交換を行っていた。これは医療者にとって、対象によりよいケアを施す為の大切な過程であり、チームの連携を強くすることに繋がると考える。今後は更に積極的な姿勢で実習に挑み、チームと対等な立場で対象のケアについて考えていきたい。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

今後の取り組みとして、地域の特徴に合わせた対策を行うための視点やアセスメント能力の向上に努めたい。また、イギリスでの大きな学びとして、助産学生や新人助産師が指導者や医療チームに対して対等に、かつ積極的に自身の意見を言えるような教育システムに関しての研究についても考えていきたい。また、個人の目標として分娩実習が控えているため、自身の助産力向上のために疑問点や相違点については無知を恥ずかしがらず分からないことは聞き、相手の考えを理解し、積極的な意見交換の環境を構築し、対象にとっての最善のケアについて考えていきたい。

（別紙６－２）

# 学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：保健学研究科1年

氏 名：金沢美結

| 授業科目名 | 実践助産学演習 |
|---|---|

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

研修先で現地の助産学生や助産師から話を聞くことができ、イギリスでの助産についてや、助産を学ぶ教育体制について学ぶことができた。その中で、産婦が満足できるお産について学ぶことができ、日本は、病院で分娩台に乗って出産するというイメージが強いが、イギリスではリスクが低い産婦は水中出産を望むことが多いらしく、日本との違いに驚嘆した。「邪魔されないお産」を目指しており、母と生まれてくる赤ちゃんが誰にも邪魔されず自然に出会えるよう、産婦がやりたいことが言えて実践できる場所になるように産婦と関わっているということだった。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

現地での生活を通して、日本との違いを感じる部分が多くあった。その中でも、イギリスは日本より人権について考え行動している人が多いと感じた。ちょうど私が研修に行っていた期間に女性の人権についての大きなデモを行っていた。フェミニズム発祥の地であるイギリスは、制度上の男女差別は少なくなってきているものの、女性の社会進出や職業的地位など、ジェンダー格差や無意識的な性差別意識は未だ存在している。それに対し、イギリスの女性は、大きなデモを行うことで問題であると主張することができていると感じた。女性の権利は女性自ら作るものであり、女性として豊かに生きていくために自身の人権について考え主張することはとても大切なことであると感じた。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

研修前後で自分から他人にコミュニケーションを取れるようになったと思う。私自身なかなか自分から行けない性格だ。しかし、イギリスは見知らぬ土地でわからないことだらけで、自分から現地の人に英語で喋りかけ、道や値段、設備の使い方など聞かなければならないことがたくさんあった。自分の英語力に自信がない上に、自分が聞きたいこと、疑問に思っていることがくだらないことかもしれないという気持ちはあったが、勇気を持って声をかけ、聞くことができ、何度も繰り返しているうちに自然にできるようになった。帰国してからも周りの人とのコミュニケーションが増えたので、研修を通して自分のコミュニケーションの仕方を成長させることができたのではないかと考える。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

イギリスの研修で助産のことや、現地に暮らす親子が心身ともに健康に過ごせるような工夫についてたくさんのことを学ぶことができた。その中でイギリスでは、対象が何がしたいのかといった本人の希望や思いを大事にしており、対象の思いに寄り添った支援が行われていると感じた。今後、このような支援を支援を実践で取り入れていくために、どんな人であっても一人一人を尊重し、対象の心に耳を傾ける姿勢が大切であると感じた。今回の研修ではたくさんの経験をさせていただき、多くのことを学ぶことができた。学んだことを活かせるよう、日々努力していきたい。

（別紙６－２）

# 学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：保健学研究科1年

氏 名：甲斐郁美

| 授業科目名 | 実践助産学演習 |
|---|---|

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

研修先では、イギリスにおける周産期医療の現状や助産師教育の実際、地域での母子を支える体制について学んだ。日本とイギリスでの違いを知ることはもちろん、イギリス独自の制度や教育体制を学びこれまで知ることのなかった新たな知見を得ることができた。同じ助産師という職業であっても、そこに至るまでのカリキュラムや実習形態が異なったり学生と教員との関わり方が異なったりするなど自分自身の環境と比べて国ごとでこんなにも違いがあるのかと驚いた。また、地域での母子を支える体制が日本よりも個別性がありどんな事情を抱えていても丸ごと地域で支えていくという信念に感銘を受けた。様々な職種の方々と関わる経験をしたことで、私も今後より一層勉学に励みたいと思うと同時に、目の前の対象一人一人のニーズに向き合い寄り添ったケアを提供できる助産師を目指したいと感じた。

初めてのイギリスでの生活を体験し、日本と異なることがとても多く新鮮だった。これまで日本で生活してきた中で当たり前だと思っていたことが現地では通用しないことが多々あり最初は戸惑ったが、地域が違えば生活の仕方も違うこと、文化にも多様性があることを再認識した。英語圏での生活は、自分の英語力・読解力を試す良い機会になり、いつも以上に色んなところにアンテナを巡らせながら行動することができた。また、コミュニケーションをとる機会がとても多く、日本と比べて自分の意思表示をすることが多かったり通りすがりの人とも挨拶だけではなく軽く世間話をしたりするなど人と人との関わりが密接だった。日本ではあまり経験することができないものであり、私は人見知りということもありこれまで積極的にコミュニケーションを取ってこなかったが人の温かさを感じたことで普段からコミュニケーションを取っていこうと感じた。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

研修を通して、自分からもっと積極的に行動し意思表示をすることの重要性を学んだ。助産師・助産学生との交流を経て、イギリスでは学生のうちに分娩介助を40例行うこと、そして普段から講義と実習のローテーションを行うためハードスケジュールで自己管理能力が求められることを知った。日本とは全く比べ物にならないカリキュラムであり、学生自身の主体性と努力がないと成り立たないと感じた。入学してからの自分は、与えられた課題や試験をこなすことで精一杯であり主体性を持って学習に励んでこれたか疑問が残る。しかしイギリスの学生は皆が助産師となるために一生懸命で明確な目標と積極性を持っていたため自分もこのままではいけないと危機感を覚えた。もうすぐ分娩実習も始まり、研究やその他の実習と並行して進めていく必要がある。優先順位を持って、自分が何を学びたいのか明確にして勉学に励みたい。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

今後は、地域社会の発展のためにより一層多職種連携について学び、海外の現状についても適宜情報収集して自分の見識を広げていきたい。イギリスのファミリーハブでの学習を通し、母子を支える職種は医療だけに留まらず実に多様であることを実感した。自分でできることには限界があるため、積極的に他の人・職種に頼り意見を求めることが対象へのより良いケアに繋がると考える。また今回初めて海外での研修に参加し、日本と海外の違いを目の当たりにした。自分が置かれている場所だけで学ぶことは、それ以上の見識を得ることにはならないため積極的に海外の動向も注視し取り入れられるものはどんどん吸収していく姿勢を持ちたい。普段から色々なものに触れ、最新の知識・技術をアップデートすることでエビデンスに基づいた根拠ある医療を提供する助産師を目指したい。

（別紙６－２）

# 学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：保健学研究科　1年

氏 名：神谷舞里

| 授業科目名 | 実践助産学演習 |
|---|---|

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

今回のイギリス研修ではQueen Charlotte's and Chelsea HospitalとJohn Smith Children and Family Centre を見学をさせていただいた。Queen Charlotte's and Chelsea Hospitalではバースセンターの見学と助産学生との交流、働く助産師の方からのお話を聞く機会があった。日本以上に助産師主体となったお産が行われており、産後うつも日本より発症する人が少ない印象を受けた。また、助産学生との交流を通して助産学生がしっかりも守られた環境で実習を受けていることもわかり助産師への教育も確立していることを学ぶことができた。さらに、John Smith Children and Family Centreでは子どもと家族への支援制度が充実しており、支えるだけではなく自立を目指した支援が行われていることを学ぶことができた。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

日本ではお店に行ったときに、挨拶のみで終わることが多いが、イギリスではあいさつの後に「今日の調子はどう？」といった些細な日常会話を挟むことがよくあった。最初は恥ずかしさもあり最低限の会話しかできなかったが、最終日には「今日日本に帰るんです」と自分から話題を広げることができた。そうすると店員さんも笑顔で返事をしてくれ互いに楽しい時間を過ごすことができた。この経験から会った人と気兼ねなく話しをすることは難しいことでもあるがその壁を超えるととても楽しい時間となり、自分の視野と心を広げることができるきっかけになることを学ぶことができた。また、自分の意見ははっきり言わないと伝わらないし察してもらえることもないということも今回のイギリスでの生活を通して気が付くことができた。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

海外研修のコーディネーターの方とおお話をしたときに「日本人はペコペコしすぎだと思う」ということをおっしゃっていた。その方も日本で生活していた時はすぐ謝ってしまうことがありそれから何十年もイギリスで生活をしているがいまだにその癖は抜けないが、本当に自分が悪いと思ったとき以外は謝らなくていいと思う、と教えていただいた。このエピソードから自分自身を振り返ったときに自分もすぐに謝ることが多いし、けどそれは本当に自分が悪かったときか、と尋ねられればそうでもないことがある。そのため、コーディネーターとお話したことを活かし、自分はこれからすぐに謝るのではなく「ごめんなさい」を「ありがとうございます」など別の言葉に置き換えるようにしていき自分の心に正直になって生活していきたいと思った。このような考えかたは研究前にはなかったことなので自分にとって大きな成長になったと感じている。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

自分は将来助産師になるため、今回の研修で学ぶことできた海外の助産についての知識を活かし働くとともにこれからも継続的に海外の情勢や助産システムについて学び、定期的に海外に行き実際の現場を経験してそれらを日本に生かしているような活動を行っていきたいと考えている。また、自分自身成長のためにも海外との交流を行い機会があればまた研修にも参加し助産師としてだけではなく一人の人間としてたくさんの価値観や考え方、文化に触れていき視野を広げていきたいと感じた。そして将来的には日本と海外をつなぐ架け橋となる役割を果たせる活動をしていけるようにたくさんの経験を積んでいくことが今後の目標である。

（別紙６－２）

# 学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：保健学研究科１年

氏 名：西村愛深

| 授業科目名 | 実践助産学演習 |
|---|---|

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

イギリス研修において、バースセンターやFamilyHubでの研修を行った。バースセンターでは水中出産の分娩室を見学させていただいた。日本では、水中出産は感染リスクも伴うため、積極的に行う分娩方法ではないが、イギリスでは感染症があっても、水によって感染源が薄まるという考え方があり、国によって考え方も違い、それに主なって分娩方法も異なることを学んだ。また、familyHubでは、多職種が連携して、地域の母子やその家族を支えていた。中でも印象に残ったのは、施設内で、無料で材料を使って調理をできたり、遊んだりできる場があることである。無料でそのような場を提供することで、貧困家庭に医療者が関わりやすくなっているのだと感じた。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

イギリスでの生活を体験してみて、日本人とイギリス人のコミュニケーション能力の差に驚いた。イギリスでは、見知らぬ人同士であっても、観光地などで互いの感想を言い合っていたり、私たちが日本人だと知って、日本の魅力を伝えてくれたりと、ありのままに気持ちや考えを伝えてもらう場面が多かった。私たち日本人は、ほかの国から見ると、遠慮しがちに見えたり、相手の様子を伺ったり、自分より目上の人や役職が上の人にはへりくだっているのが印象的だと教えてもらった。「私たちは同じ価値のある人間であって、誰にもへりくだる必要はない」という言葉を聞いて、適切な礼儀や尊敬の意を示すことは大切だが、だからといって、極度に自分の意見を封じ込めたりする必要はないし、もっと1人の人間として自分のことを信用していきたいと感じた。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

研修に行く前の私は、周りの様子を伺ったり、この発言をしたら自分の無知さをさらけ出すことになるかもしれないなどと考えてしまい、自分の意見を言うことに少し苦手意識があった。しかし、イギリスでは、助産師が自立していて、医師の指示の下で働くのではなく、助産師自身が専門職として主導となり活躍していたり、助産師にしか処方できない薬剤もあるなど、助産師という資格を十分に発揮して自立している姿が印象的であった。そのため、一人前の助産師として自立するためには、失敗を恐れず、自分の考えや意見を積極的に発信していこうと考えるようになった。「積極的な発言がない人は、ここでは相手にされない。何も考えていないのと同じ」というイギリスで働く方からのご助言を胸に、自分に正直に生きていこうと考えるきっかけになった研修であった。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

私は、妊娠・出産・育児において病院内だけでの関わりではなく、地域に戻った後も母子やその家族が安心して暮らせるように関わっていける助産師になりたいと考える。イギリスでは、地域で本当に困っている家庭、貧困で医療の介入を受けずらい人たちと専門職がつながるために、医療者ではない団体が市場などに出向いて、無償で医療者へつなぐ活動を呼びかけたり、善意で無償の食事を提供したりして、貧困に悩む家族が足を運部ことで、本当に困っている人たちを見つけ出せるよう活動していることを知り、日本でも、善意をもって協力者を集えば、困窮している家族とつながり少しでも支援できることがあると考える。私は、今後、病院などの施設まで足を運べない人々を見つけ出し、支援できるような活動をしたいと考える。

（別紙６－２）

# 学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）: 保健学研究科 1年

氏 名: 萩原　夢

| 授業科目名 | 実践助産学演習 |
|---|---|

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

Queen Charlotte's and Chelsea Hospitalでは、より助産師が自立してお産に関わっていることを学んだ。イギリスのお産は集約化されており、年間6000件以上のお産があり、病院も併設されているため安心してお産ができるのではないかと考えられる。また、異常がなければ、麻酔や会陰切開等の医療行為も含めて助産師が行い、自分のスキルや助産師という職業に誇りを持っている助産師の姿があった。
Family Hubs TOWER HAMLETSは他施設との連携や地域の家族が抱える子育ての悩み等を解決する施設で、妊娠期から5歳になるまで手厚く地域でサポートしていた。職員の方が“家族に自信をつけることが大切”と仰っていて、家族を支えることが子育てを支えることに直結することを改めて学ぶことができた。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

学生が実習施設の指導者に対して遜るわけではなく、対等に話し合いをしていることが印象的だった。日本だと、若手が目上の方を敬う行動、例えば、目上の方がいらっしゃったら席を立つ等目上の方に対する尊敬から起こる行動が慣習化されているが、イギリスでは上下関係がない習慣で平等な関係を非常に大切にする文化であると感じた。また、日本では時折、“場の空気を読み意見を飲み込むこと”もあるが、イギリスでは“意見を言わない方は考えが無い方”として扱われるという話を聞き、“個の力・意思”をはっきり示すことが非常に重要であると感じた。私は、自分の意見を話すことが苦手なので、もっと意思を出していくように頑張りたいと考えた。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

言語の壁があっても、わからないことや困ったことがあればすぐに周囲に助けを求められるようになった。以前は“相手に迷惑をかけないか”、“聞くことが恥ずかしい”と思い、聞くことを躊躇することもあった。しかし、今回、異国の地でわからないことは、すぐお店の方や研修先の担当者の方に聞いて、有意義な研修にすることができた。この経験から、“今、聞いても大丈夫かな”や“この質問は必要なのか”といった迷う時間が非常にもったいないと感じるようになった。相手のことを考えることも、接遇として重要な場面もあると思うが、なるべく困ったことやわからないことは躊躇せず、その場で解決できるように意識していきたいと考える。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

分娩介助技術についてしっかり復習し練習を重ねて、2年生の前期にある分娩実習で安全かつ母親の思いや気持ちに寄り添ったお産のサポートができるように努力していきたい。その後、分娩件数の多い施設に就職し、分娩介助だけでなく、妊婦健診や産後ケア等の経験を重ねて信頼関係の作り方を学び、スキルアップを目指し、アドバンス助産師になりたい。地域の助産院で妊娠中の過ごし方やフリースタイル分娩など、母親の意思を最大限に尊重できる自立した助産師になりたいと考える。また、機会があれば青年海外協力隊など、発展途上国で助産師として、母親や女性を支えていきたいと考える。

（別紙６－２）

# 学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：保健学研究科助産学コース1年

氏 名：箕輪夏里

| 授業科目名 | 実践助産学演習 |
|---|---|

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

バースセンターでは助産学生にお話を聞き、学生は担当の教育者をつけて3年間で40件の分娩介助をすることや、助産師しか処方できない薬があるというところは、日本との大きな違いであった。分娩室は幅広い空間で産婦やその家族が安心して主体的にお産に臨める空間があると学んだ。Children and Family Centreでは、若年妊婦や英語を母国語としない子どもたち、貧困層への支援も行っていた。対象を適切にアセスメントし専門職へつなげること、子どもや家族を取り巻く環境にもアプローチし、英会話教室や無料の施設利用などを通して、家族に自信をつけることの大切さを学んだ。積極的に学ぶ姿勢をもち、各施設での実習を通して、対象のできる力を引き出すこと、自信をつけ主体的に出産や子育てに臨めるようにケアすること、チームで個別性のある支援をしていくこと、助産師自身も自立して対象に関わることの大切さを学ぶことができた。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

今回、私は初めての海外であり、言語が異なり困ることもあったが、現地の方々は親切で、コインランドリーや駅で困っていた時に「手伝いましょうか」「このようにしたら良いですよ」と丁寧に教えてくださり、日本のような助け合いの心があった。また、お店などでも「調子はどう？」「どこからきたの？」など積極的に話しかけてくださり、実習施設でもスタッフの方々がとても明るく挨拶を返してくださり、人と人とのコミュニケーションも活発に行われていると思った。そのような環境があることで、情報共有や子育て等で困った時の相談がしやすく、人々も生き生きと過ごすことができると思った。滞在した地域が便利であったこともあると思われるが、公共交通機関も頻繁に出ており、駅の案内も分かりやすく、近くにスーパーやコンビニもあって買い物もしやすかった。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

私は自分から話すことが得意ではなく、最初は言語や文化の違いに不安があったが、助産学生との交流の際に、分かる英語で自分から話しかけたり、写真を見せ合ったり、表情や身振り手振りを交えて話すことで、相手も楽しそうな反応が返ってきて、意思疎通を図ることができ、コミュニケーションをとることに少し自信をもてるようになった。駅や店、ホテルでも、調べたり人に聞いたりして情報を得て、積極的にコミュニケーションを取ることができた。自ら動くことで、情報や助けを得ることができ、問題解決につながっていくと思った。また、スタッフや助産学生の活気や自信があり生き生きとしている姿から、堂々とした姿勢や必要以上に謝らないという姿勢も大切だと学び、もう少し自分に自信を持って行動できるようにしていきたいと思った。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

来年度は、分娩実習があり、実際に分娩介助をさせていただくことになるため、これまで学んできたことや、今回のイギリス研修での学びを活かし、適切にアセスメントし個別性のある支援や、対象が主体的に出産、子育てに臨めるようなケアを行えるようにしていきたい。また、責任感を持って対象へ関わること、病院で過ごす対象のことだけではなく地域で暮らすことをイメージして関わるようにしていきたい。就職後は、臨床での実践を通して知識や技術を習得し、向上心を持って学び、対象へよりよりケアを行えるようにしていきたいと思う。そして、様々な現場を経験し、ローリスクからハイリスクに対応できる助産師となり、将来は鹿児島や出身地である離島の医療や地域保健に貢献できるようにしていきたいと考える。